

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2018. 5



平成30年5月1日発行(毎月1回1日発行)第66巻第5号

No.720

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでもギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なもの同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

一一〇一八年五月号（通巻七一〇号）

私と短歌との出会い（189）

甲田啓子
19

送風塔

橋本曠子・藤田美智子
54

◇今月の二十首詠……アロエ・ベラ

歌壇月旦

73

■作品[A]

若い世代と短歌

54

A C B A

三月号作品批評

80

高橋和代・滝田靖子他

A……佐久間辰・関根和美

54

田井千恵子他

B……ふじとよひこ・川辺京子

4

武田幸子他

C……近藤栄昭・玉井綾子

74

植田和子他

オリーブ集・茂木 炎・西堀啓子

90

赤坂たけ子・伊東ミイ子他

久我田鶴子

16

稻家和子・鉄地川原朱美

春日いづみ

48

◇今月の二人

今月の二人・作品評

18

■関根和美著「記憶する丘」書評

最近の歌誌より

18

二本木の丘より

久我田鶴子

79

壮大な計画のなかに

久我田鶴子

108

■永塚節子歌集「かえるっぱ」批評

クリップ

106

「かえるっぱ」を読む

神田通信

107

捨ててきしもの一つだになし

表3

磯田ひさ子

（写真・歌合せ）作品募集案内

表3

◇シルクロード・カフェ

（責任編集）木村文子

（表紙デザイナ）Tazuko Kuga

アロエ・ベラ

菊地 栄子

よろこびを運び来るような風であれ真向かい行かん西沿いの道
 出掛けとて過敏になれる神経か炬燵を消してストーブ消して
 エレベーターを横目に見つつエスカレーターに運ばれて居る何時ものように
 上衣より出でしブーツの一一本脚弾み居しかばあどけなく見ゆ
 豊いなき日日にあらざりかの月は馴染みの蕎麦屋の閉店に合う
 今宵行く頭上の月の明るさや「ひとりにあらず」口付き出づる
 息災にひととせ過ぐる里だより粒よりの林檎今年も届く
 美味しいと思うは含みし一粒に噛み締めにける持続と言うを

昭和十七年生まれ。
 湾の会所属。
 歌集に「山川みどり」「そして旅」「落葉の嵐」がある。

差し当たり差し障りなき幸いに掃除始まる草箒持ち

念入りとは言いがたかりきまたの日に譲りさ庭の朝仕事終う

家中に取り込む鉢のアロエ・ベラ葉先鋭くみどりを勢う

わが背丈飛び越え不意に仕切りくる声にはならねど〈慎重にあれ〉

遠からずおとない來たる手袋も花の帽子も失いゆく日

ぐすぐすとすぐ実行に移せぬを誰か言わずや沈着ゆえと

どのように納得しようかなじりたき言葉が胸の底にうごめく

ストーブに沸きたる湯にて茹でているひとりの暮らし慎ましくなり

友として親しみきたる蜘蛛の巣の風呂の天井は払わずに置かん

何もかも洗濯槽に放り込み洗つてみたし過ぎたる日々も

サザエさん終りの場面のじゃんけんにどうしてもちょきを出したくて勝つ

演壇に飾りしよりも咲き誇る出番終えたる百合の花花

作品 A

高橋和代

興をひく

・桃

竹下妙子

霧島の雪

・霧

医院にて出会ふ老女に声掛けす淋しき顔をゆるめてあげむ
老人施設には縁なきわれと思ひる 先行き如何にとふと思はせき
深みゆく病を憂さを抱ぶるも自儘さ思へり老女の涙に

微熱ある身はワクチンも受けられず流行性感冒怖れて幾年ならむ
医者通ひ裏目に出てインフルに二十日ばかりを苦しみし

新聞のスポーツ欄もイベントも要なく食後の休み短し

病み篠る身には興ひく事減りて「素通りさせり」と言ふか「忘るる」

滝田靖子

甘美なもの

・新

田土成彦

縄文

・宙

講習会といふ名の懇に囚はれの週末講師の口癖を知る

イケメンの講師だねなどざめいて楽しげな君たちこそが正しい
命なきもの美しく風に舞ふ終焉を贊美はしないけれども
甘美なるものとして若きわれわれの傍らにありき自死は心中は

人はいつ自分の命をあきらめてしまふのだろうまた雪が降る
死はかくも身近にありぬおのが身の終焉に気付いてしまふ前から
ありがたうと言つてしまへばそれはもう予定調和のやうなサヨナラ

望月のさくらのものは願はねど抜けず痛まず長引かずあれ

けぶらふがことき春日の若枝に新芽はもてど雪覆ひたり
消えがたになりし霧島の峰の雪朝けに会へばまた新しき
ほかほかの酒饅頭を購へど霧島山に雨寒く降る
里川に浮かび鴨ら風のなき春の川瀬に向きむきに浮く
木蓮の枝に春待つ花芽葉芽しぐれの晴れし朝にかがやく
雪降りし霧島にかかる雲の影照りかけりゆく春の朝は
春の使者色鮮やかな薔薇芳香ただよふ蝶梅と来つ

縄文の温かき世を恋ふなれど住むにはやはり今の世が良い
密度から言へば列島の人口はいまの半分ぐらゐが限度
卒業後五十年たどる通学路ポスト以外は記憶にあはず
一年前何があつたかバス停の前の理髪店今日開業す
むかしとは十年前か三丁目バス停横に自販機残る
この冬場靴下を履いたままに寝るゴムの緩んだものを選びて

望月のさくらのものは願はねど抜けず痛まず長引かずあれ

田土才恵

海の町

・宙

高津砂千子

氷上の舞

・風

炎られて跳ねたる牡蠣の無念さに握る火箸の手元がゆるむ
牡蠣殻のバケツ一杯積もりきていたぐく命ふとも思いぬ
海の町豊かに在れば代を繋ぐ系譜の確たるを見す
内海の沖ゆく船のたちまちにまぎれゆきたり大き島影
船祭り勇壮ならんリーフレットしばしみつめて時の声聞く
垂れ籠めし黒雲のした島影の呻くがさまに海に鎮まる
千種川名も美しき川の辺に松並木見ゆこれぞ日本

玉井綾子

雪空

・羊

四年ぶりの大雪なれど六歳の吾子の記憶に初めての空
インフルエンザの流行時なり校庭に積もりし雪は静かに溶ける
校庭の雪で遊べず学童保育のテラスにひっそりミニ雪だるま
吹く風に巻き上げられし帰路の雪 子らに無数のミラーボールよ
通学路 残雪ごとに立ち止まる黄色い帽子の蟻の行列
自動ドア出でて路上で見上ぐれば雪の始点は日本橋タワー
まだ降るかと見上げし空に超高層ビルが雪雲をおんぶして立つ

高尾恭子

流離

・大

中島央子

大祓

・森

浅漬けの柚子大根をたずさえて日に日に速し母の棲む家
口だけになつても母は毒を吐くカーネーションの一輪赤し
不意打ちにデイサービスは嫌いやと母の視線がまっすぐ伸びる
床の間の千両つぶらな実が赤い 一月去んで二月は逃げて
今日吐いた毒をつぶんで聞ふかし真一文字に唇をかむ
境界を行きつもどりつ人は斯く生き死にこえて闘いぬべし
底冷えの京の町家に遙髪の母は流離の灯りをともす

着氷のせつな飛び散る氷のつぶてあざやかなるをカメラは捉う
晴れの日の衣裳作りし人もまた氷上の舞胸あつく見ん
氷上に足首撫ずるスケーター演技ことなく終えし証ぞ
けがをせし足に感謝とスケーター演技を終えて笑みつつ言うも
何よりも自分に勝てたとメダリスト二十三歳のみだながらに
跳びあがり表彰台に乗りしひと右手たかだか宙をつかめり
金銀のメダルに沸きし夜の明けてふくらみはじむ庭の紅梅
平昌五輪 始まりたるや ひねもすを、テレビさじきで昂りてゐぬ
雪原に聖火もゆるや 技きそふ、生命あふるる 風やよし
銀盤に美しき滑走「羽生結弦」。祈る思ひよ ジャンプ成功
韓国は近つ國なり。夫好みし「白頭山節」甦りくる
京の巧の手になるといふ 五段難。われの齡と 共に古りたり
難日と 結婚記念日口實に、うから集ひて ほろり酔ひたり
この年月 蔤にねむらす雛人形。わぶる思ひぞ 如何にせよとや
まもり札火伏せの笹を焚きあげて 祓ひの列に夜氣をまとへる
遠しとも近しとも聞ゆ年かはる夜の梵鐘かさなり響く
人形に名を記し息を吹きかくる富士山本宮浅間神社
山すそに湧き出づる水のいくところ世紀をかけて澄み透るなり
湧き出づる富士伏流水をあふれしめ リットルを家苞にする
正月のうから七人かこみたるすきやき鍋は飛騨牛にして
輪になりてトランプカードを受けわたすようこそ魔女のあやしき眼

中島義雄

菜の花畠

・岡

白子れい

初釜

・洛

天界のごとく匂へる菜の花が古鏡となりてひとを顎たしむ
菜の花に黄晉ながきこの畠の空耳にして妻の鍵音
畠の石彈く鍵音ありありと菜の花畠たそがれてゆく
暮れるまで鍵音たて妻のかげ顎たす懷ひもわれのみのもの
悲しみは風化のときを知らざれば暮れなづみゐる菜の花のうへ
振り向けどすでに返らぬ追憶の間にしんしんと菜の花香る
過ぎにしを言ふな思ふな家よりぞ呼ぶは夕餉の暖かき声

永塚節子

薺椿

・銀

ばばりょうこ

反逆

・鹿

あかるきと窓をあくれば銀世界一夜のうちにかくもつもりで
雪の朝つどい来りし社中らとこころ一つにすすむ初釜
床の間の結び柳に「和」のこころこめて垂らせりいつまでもと
こころ込め煉りゆく濃い茶と一ろりと乾けるこころのみど潤せ
ほんのりと紅さす菓子の葩餅いにしえの御所へ想いつながら
今年またよろしくと注ぐ祝い酒緊張ほぐれ話のはずむ
茶の道は一步一步の積みかさね吾のひと生も一日ひと日の

芽吹きにはまだ遠けれど枝枝の向こうの空は淡き春色
食卓に色を添えるは西王母紺侘助に白玉椿
百近き椿に心躍るともとどのつまりは薺椿に終る
油揚げ大根の葉の味噌汁を旨しと思う歳となりたり

雨のち晴れ大風吹きて杉檜ここぞとばかり花粉を飛ばす
大風に右へ左へ五分咲きの河津桜は耐えに耐えおり
海へ向く傾りに点点いそきくの風吹けば風に雨降れば雨に

萩葉子

春の雨

・銀

浜谷久子

晴れ間

・地

春の風雨に未明の部屋がふくらんでいる
茉莉花の固い花芽を確かめつつ安堵している如月末日
雨が山の風をつれてきたのだろうか 寒い
春の雨がこうも冷たく降る 三月の鉄門の錆
いちめんの菜の花畠に行きたいのに盛り沢山の私
眠りたいのに眼れない詮方なくして白湯飲みに立つ
元気かなと蓬まんじゅう持ち寄りて茶を飲み息子帰りゆきたり

敲打つ朝のら猫の寄る居かたく閉ざされ静まるばかり
踏み切りの鐘打つ音のながながと開かずの扉の向こうの静止
日の当たる道を歩こう立春を過ぎて寒波の割れ目の晴れ間
歌会の仲間と迎る十余年新年会のプラン加わる
会場も時間も新たに出発の歌会は駅前訳ありショップ
飛び込みで歌会会場頼み込む駅前立地冷暖完備
遠方の参加を迎える歌会の長年午前の午後への移行

浜本 芙 美

吾木香

・夢

藤川 和子

鎧

・眉

あらくさをむしり取る手のふと止まる蚊帳吊り草に合ひたるとき
植木鉢の土にぬけ殻残しし蟬いすくの木立にひと世終えしか
辛抱づよき母なりわれは母の子よ風にもまるる千日紅のはな
十八歳の母が懸命に授けくれしこのいのちを生きん
登校の童にやすやすす朝の声かけるをためらい見送りて併つ
季の花吾木香など挿しゆくもわが情動の海さわだたず
水切りのザルよりわれに向くホーク過る思いへ鋭く光る

檜垣 美保子

川面

・昂

のぞきこむ川面に映るわが顔がすきゆく舟の波にゆれつつ
満ち潮の河口にはげしき雨の降り感きわまりてふくらめる水
釣り糸を垂るとみれば少年はしだれ柳の枝垂らすなり
太陽はビルに隠れて見えぬまま川面に浮かびきらめく光
レブリカのニケの首なき彫像が客なき店のくらがりにあり
ひなげしの鉢の六つをならべたるその間隔をははに替めらる
勝手口ばたんと鳴ればあらわれて弟夫婦手を振りながら

福田 庸子

十字架地蔵

・今

村長の古墳か小さく丸き丘浅間嶺仰ぐ冬の畑に

東側にソーラーパネル押し寄するいつしか平野は姿変へたり
渡りきてひもじかるべし鶴らは尾羽ひろげて鶴と争ふ
夜の明けて雪搔く路の先の辻スコップかかけ合団くるる人

亡き夫が筑紫の島に見つけるし十字架地蔵は畿内池田に
関根和美著『記憶する丘』に記載ある十字架地蔵は遠き旅して
一枚の写真がつなぐ縁なり十字架地蔵をしみじみと見つ

春光の眩しき朝脱ぎすてしダウンはすなはち鎧のいとし
春めきて見知らぬ人とも言交はし足もと軽く鎧を忘る
紅梅の枝さし招く庭の内ことしも寿ぐ旧正月元旦
こもり居の厳しき冬もあたたかき声かけくるるうからにたらふ
如月尽彼岸桜は紅ふふみ亡き姉、いもうと此岸にいます
政治色辻の五輪ピヨンチャンの氷上熱き競演つづく
栄光のメダルに笑顔のならびるる日本女性は雛さながら

藤田 美智子

笑はぬ二人

・新

「二十歳の笑顔浪江に戻った」と見出しつゝ写真に笑はぬ二人が映る
町民の二パーセントしか戻らざる町に「おかえりなさい」の看板が立つ
南を指し延びる線路は錆びたり上り電車の出ぬ浪江駅
ふるさとに戻れぬ人らを忘れるわれの視界を雪はさへぎる
あの日までの油断はもはや語られず年に一度の「あの日」また来る
人の住まぬ街を巡れる風の知る時の流れを歳月といふ
雪客と名づけられたる鳥のため野は一面に雪を積みるる

藤森 巳行

赤羽

・銀

「奥さんが料理上手で幸せね」それは作つてくれたらの話
手作りのおかずを頼むと言ふ我に「お野菜とつても高いのよ」と妻
「瘦せたのはダイエットなの恋患ひ」「いやいや違う生活苦です」
秋田おばこ謡ふ民ちゃん好きになり通つた赤羽民謡酒場
民謡が荒んだ心に沁みてゆく工事現場に立ちしあの頃
出稼きの労務者連れて通ひたり民謡酒場ふる里聴きに
スズラン通り一番街馴染みの店は今はなく我が青春も遠くなりたり

船田清子 汝がいぶき

・天

松永智子 光

・嵐

歌々になほも生きる汝がいぶきひたに身に浴びパソコンに向く
白楊の並木の奥へ連れ立ちて砂の断崖めざして行けり
キジルなる窟の壁画の「五絃琵琶」見る横顔今も思づき
クムトラの岩の上なる樂天窟心はやるや吾を置きざりに
靈鷲山 仏陀の像へ称へしはアッダンサラナンガッチャーミー
きさらぎの夕風の冷えやや薄れ草木の息吹きか春の香のたつ
桜木に小豆ばかりの花芽たち陽にさらさらと愛でられてゐる

牧 雄彦 朝の雪

・大

春きざす光の中を舞ひ下りて雀は天のこゑを運び来
熱に臥し硝子窓より見てゐるは冬空を截る電線八本
寝室のパツチワークの壁掛けの象、犬、鳥たち空を翔けゆけ
沖縄にて求めし陶器のシーサーが雪をかぶりて朝の日を受く
赤味帯ぶる沈丁花の蕾なほ固く朝の雪をかづきてゐたり
山あひの棚田に動ぐ人影の小さく見えて朝の日が差す
コンクリートの割れ目に生ふるネコジャラシ小さき虫の住処なるらし

松浦禎子 蔽の町

・羊

幾重にも青い山脉に囲まれてわたしをつつむここはふるさと
わが祖々の荒むるたましい引き受けて巡れる山河ふるさとなれば
早く逝きし幼なじみの仏前に香をたむくる旧益をきて
セイラー服の茂ちゃんのみが浮かび来るそのち病めるあなたを知らず
内蔵に先々代の人々のいで入りし跡その面影も
いすこより渡りて來しや五兵衛家の仏壇はひそと本堂奥に
ある時代を栄華にありし人々のみなすきゆきて安堵すわれは

泰然と唱へる笛が歌友への般若心経乱れに乱る

風邪に伏す七日ばかりを潜り込む幻海に於てエラ呼吸せし
ルサルカは遙かな彼を吾は癌の快癒を願ふしろがね月に
「失はれた時を求めて」声にして読むも明るき今日は立春
ミーチヤンが顔を洗つたから雨に二・二二の今日は猫の日
節分は過ぎしに端の妖怪のやれヤイカガシまだ外されず
初めての翁のお面付けしまま雪の金沢歩いてみむか

宮本靖彦 平昌冬季五輪

・凌

高空を舞ふ鳥のこと翼もたぬ若人の飛び限界知らず
マスマディアの安請合と國の願ひ背負ひてメダルの新記録良し
豚テキに熱爛一本毎晩の我が家の席に今宵はパンシユート
幼さを卒へし高梨四年間のブレッシャーに克ち飛躍のメダル
水上の睨み迫力今は消え二人姉妹はにきやかに和す
一瞬の隙つき見せし力わざマススケートの初代女王
圧巻の滑りに跳びに気品さへ漂ふ羽生に花投げ止まず

三 好 聖 三 初 音

・伊

もとむらしげと 小 鳥

・そ

梅入りのこぶ茶を飲んで休みたり畠に草をむしりたるのち
右へ右へと傾きゆける世界かな今日うぐいすの初音聴きたり
ふきのとう摘んで愚妻に渡したりいやはや春のさきかけとして
絵のなかの猫等がさやぐそれぞれに異なる視線のふくらみを持ち
消えてゆく月を見上げる幾分か赤らに顔を染めて漂う
梅の花いくつか残っていると言う春の嵐の過ぎ去りしあと
物置の古きトタンは風に舞い畠に鏡のおもてを晒す

御 代 田 澄 江

いろせ会

・茨

八 乙 女 由 朗 春 色

・柴

・柴

「水の木」ラセナに水やれば即吸ひ上げてねつとり甘き露を宿しぬ
ドラセナの一番高き葉を撫でつ君は希望よと言ひて水やる
「山が動いた」言ひしおたかさん懐かしむ野党團結われば願ふに
元總理小泉細川相携へ脱原発を推進胸のすくなり
老い痴れて童に還るうつくしさと近江友七『一言主』に詠ふ
同母兄弟を色背とふ友七の一言主新年改まり初めて知りぬ
一つ二つ病持ちつつ長兄にならひ七人語らふわがいろせ会

茂 木 煙

兜太さん逝く

・埼

山 下 雅 子 平 和

・平

・習

兜太さんの多くは知らずも『海程』の主宰と遡けり九十八歳
激動の戦時から平成の平和まで閲して長寿兜太さん逝く
名聲を句界に世間に知らしめて秋待たず逝く兜太さん惜し
鄧斌とふ名前の人りし今朝の記事蘭州麺の主にありぬ
木の札に墨書の文字は「運転手鑑札」とあり明治の免許証
一月のわが誕生日近づきて免許証更新の検眼をする
視力検査椅子に腰かけ待つ壁に「免許証返納しませんか」やだね

看護師に血を採られつつ何となく冷たき人と思いていたり
穏やかな人と言われるそのたびに胸にかすかな痛みが走る
若き日に同じ身長なり妻が我より小さくなりしに気づく
室内に六人がいて我が入り一人出でゆけば玉突きのことし
マラソンを走る夢捨てつケランドを一周走りてこの喘ぎゆえ
踏切に待ちたるあいだ何百の目に見られつ記憶はされず
朝日さす路上に遊ぶ小鳥一羽舞いてしまいしと胸騒ぎする

ひんがしの阿武隈川の対岸は山削られて禿を曝せり
ふるさとにありたる居久根失せたれば春風荒く「彼岸」近く
喰い荒れし冬の嵐に削られてとなりの畠小屋捨象をなせり
小ぶりなる犬と連携とる少女夕暮せまる農道を行く
ガラス戸の幻影に怖びて拳ぐる声妻あればわざ師となりてガードす
適えありてふるさと祭りに展示せり晴れがましきよ色紙短冊

大寒のひかりの中に赤み増すアロエたくましみんなみの花
「この憲法のおかげ百五歳になりました」日野原ドクターの恩顔愛らぬ
母の手とり血圧指導にこめられし意志と情熱ありありとして
現憲法大事の重き一言を遺し旅立ちたる天寿を遂げて
豊かなる睡眠栄養運動が大切いのち見つめて生きよと
平和求めし日野原氏逝きさらきの雪に消えたり俳人兜太氏
戰知る故に戦は駄目なりと兜太氏の思いわれを貫く

・柴

横田敏子

三月

・福

朝井恭子

如月

・森

明け方のボストン新聞届く音そこより今日の刻動き出す

昨夜の雪きれいに溶けぬ北陸のあの大雪は消えただろうか

蝶番外れたようなる両足のバランス取りつひと日暮れたり

山の端にすとんと落ちる冬の陽の心残りの夕焼けの空

三十年仕舞い置きたるカシミヤのコートこの冬孫が着う

キャメル色のロングコートの襟を立て颯爽とゆく孫の後姿

三月は「フクシマ」の月 記憶から永久に消せない福島人われ

吉内尚彦

舞鶴港

・浜

飯田勤

庭

・む

仏壇の引出しの底九歳のわれの写真に見入りております

舞鶴の海青くして軍艦の大きかりしは今に忘れじ

明日はあの軍艦に乗るという叔父を見送る九歳ありき

この叔父が今日で見おさめとは思わざりしよ九歳のわれは

軍服の父とモンペの母等と叔父を見送る舞鶴港に

「忠正」墓標一つの叔父はいま「戦争などをしてはならぬぞ」

モンペなど知らぬ世代の増えしいま昭和は遠くなりにけるかも

吉永惟昭

冬の祭典

・熊

磯田ひさ子

スカイツリー

・森

心・技・体一糸乱れず蹴る氷四人の娘 金メダリスト

半パイプ人工雪に軽業を競うがに翔ぶ 銀メダリスト

雪原の風を捉えて幼より鳥となりし身 銅メダリスト

カーリング見かけし我は場外のコーチとなりぬ 銅を取ったぞ

平昌の五輪祭典わが依りしスポーツ観とは月と遙

参加する喜びの意義プロ・アマの資格差ありや思いあぐねる

年毎の冬を生き抜く民族の美と技を競う種目が欲しい

如月の風を聞きおり生れし日を一人茶房に珈琲のみつつ
ひと時を童女に還る雛の節母の作りし人形飾りて
かつかつとヒールの音を響かせて若き女われを追い越しゆきぬ
入院を知らせて來たる友の電話「余命二か月」と然りげ無く言う
臥す友の好む水仙抱き持ち病室までの廊の長かり
病む友の腕に注しある細き管血の色透かせ眼に痛し
梅白く咲く如月の寺庭に凜と在りたる亡き師を偲ぶ

市原志郎

春へ

・萬

奥田清和

ことば

・大

クロッカス咲く玄関にポツツリと日が差しておひが生の如
血糖値はいやがうえにも上がりたるわが誕生日の次の日なれば
ようやくに生きて今年はや二か月が過ぎて朝日は豊かなりけり
春めいた日もあり冬のことき日もありて今年も二か月は過ぐ
わずかばかりの雨の音する寝室は籠りてすごす一日ありたり
どのチャンネルに廻しても同じ事のみを報道している今日の一日
直接に我の命とかかわりはなけれどもテレビ報道見続けており

市原やよひ

雪柳

・萬

作詞せし中学校歌受けつきて唱はれるを人には言はじ
春はものの句になり易き街なれどもの売りのこゑひとつだなく
聞きとれぬ早口ことばの競演にすべなきものか文科省どの
自我意識凝り凝りゆけば末の世は魑魅魍魎の胸にをどるや
ふるさとは花のみなりと詠みたりしいにしへ人のよみがへりくる
生粋の京の歌人の君なりしよき日よき折よき酒酌めり
大阪弁極悪非道に貶めて紫綬の褒章得し人のあり

奥田陽子

男雛女雛

・羊

雪残る歩道をよちよち歩く児の解け始めたる雪だるまにも触れ
汚れたる雪いつまでも残りたりここは日陰と知らしめながら
都市の雪の定めか黒き塊となりて残れり歩道おちこち
雪だるま瘦せてゆけども一週間立ち続けたり寒き冬なり
暗きうた政治批判のうた並ぶ今日の始まる新聞を閉ず
雪柳一輪咲けり大雪に耐えたる細き細き枝先
三角に樹形整うメタセコイヤ僅かにみどり萌え初む公園

大浪美雪

くじら

・森

小野雅子

梅

・羊

海に向く丘のなだりに仄暗く杉に開まる鯨塚あり
一年に一基造りし鯨の碑百二十基とぞ苦むしており
岩屋よりはみ出し並ぶ石宮に供花の如くほときす咲く
「魚偏に京と書きて」と詠われし鯨の頭領醍醐新兵衛
奥山の小さき神社に祀らるる化石となりし鯨の頤
一世帶十キロまでと鯨肉の予約始まるまつりの近し
売り出しの商店街の目玉品竜田揚げまた鯨のバーガー

柏原宗一 南岸低気圧

・羊

草刈十郎 霜柱

・春

・世

一時間前に回覧配りするとき雪のはだれはかすかなりけむ
南岸低気圧が明らかになり厳しく雪が降りしく午後は
三十九年ぶりのこと東京に大雪警報すさまじく告げてゐるかも雪の降りつぐ
南岸低気圧が太平洋岸はせまり来る雪の模様のさだかなるとき
積雪は今夜の寒さを思はする南岸低気圧はままならぬさまに
テレビにて寒波來たると告げてゐる今夜から深まる寒さか知れぬ
午後の雪踏みかためられ立往生の車ニュースは今夜のはげしさを映す

菊地栄子 ノルマ

・鷺

國井節子 肝心要

・春

時雨降りかかりし虹のふもとまで脚のとどかぬ時雨虹なり
人を待つわが影法師行き来する師走の足に踏まれるなり
焚火をばかこめる人らさまざまの噂の火種ここにあるなり
寒風の吹き過ぐバス停みてわれひとり待つ始発のバスを
しんしんと積もりゆく雪刻々と減りゆくのみなるわが時思ふ
落ちさうで落ちない水の一滴が蛇口はなれぬ凍て空のもと
さくさくと踏めば音立つ霜柱少年の日の登校の朝

簪笛に驚き寄りゆく道の端積もれる雪は物音を消す
凍結を免れるなきひとところ元日の空映して青し
氷結もこらえきれず平する時打つごとき窓際の音
体重の増えしを即座に指摘され検診と言つ採血を待つ
あらかたを入れてしまつただしの素小瓶の蓋を取らんとしつ
惜しまる残り僅かを読みさして刻みはじめ玉のキャベツを
真っ直ぐな道の彼方の松林歩みてゆかん今日のノルマに

木村文子 だれ

・羊

菊岡栄子 孫正ちゃん

・蓮

あたらしき世界が開けるものならば今の医学を信じてみよう
もう君は何も言つては下さらぬ自分で決めて飛び降りるだけ
真刷新なレンズに替へしわれの目に痛きまで白いビヨンチャンの雪
針穴に糸がすんなり通りたりこれが一番肝心かなめ
線香の銘にあたり薄墨ざくら今年こそ行くべし根尾谷ざくら
母のこと百まで生きて死ねたならさくらの下で死なずとも良し
母が逝き夫が逝き義弟までもお次はなどてわたくしを見る

夕空にカラスが渦を卷いているその中心にいるものはだれ
鳴き声を聞きつけカラスが次々と空半分を覆うくらいに
竜巻のような渦は幾重にも卷いてカラスは闇の声あぐ
真ん中に風船のようにゆれているものに向かって飛びかかりゆく
黒い渦高く低く風おこしうねりをもって空を揺らしぬ
風船のような体は逃げ場所を求めて落ちて落ちては昇る
風船は割れて空で屠られぬ落ちるものなし清い空のみ

中学校の特待コースには乗りたくない孫正ちゃんの意志は動かぬ
単純に学費無料を願えども特待生を望まぬ息子や孫
P.S.P難病患う吾なれば素直になれる人の情けに
わが歌を夫はパソコンに打ちくるる吾への介護の疲れあらんに
歩くさえ夫の手を借りる吾なればその有り難さ身に沁みてくる

小泉泰清

如月の日々

・う

小林能子

あらうことか

・羊

齡深み医薬に親しみ老木の凜と咲きかる白梅羨し
 うしろ手を腰にあてがひ歩きる水仙の花に声をかけつつ
 白茶けし笹の葉ゆらぐ竹林、若草いろの春が近づく
 すすける竹の林は青芽立ちみどりの竿を森に突き出づ
 冷ややかな風吹く夕べ円き月ひんがしに出で見透かされをり
 冬眠の子熊を真似て手足曲げ横臥し布団に埋もれ春待つ
 白内障の手術を受けし左の眼遠くの里山青白く冴ゆ

河野繁子

現世

・雁

この寒さもうゆく頃と雪解けの土にかがめばいぬのふぐり咲く
 阳に向かい大きな口を黄にあけて春を捉えし福寿草の群れ
 百歳まで生くるはうとましさりながら百歳体操に休まず通う
 風邪ひけば我に移すなと言う夫と六十一年過ぎ来し記念日
 某新聞社あなたの六首を載せますと最後に示す多額の費用
 全国版新聞社名のる男の声我の歌集を知りつつ話す
 妻のはがき出して間なしに遊かれしや佳き歌なりし末次昌子さん

小西美智子

わかれ

・大

ひとり住まいの病みいる友に届けたりつやつや光るみしらず柿を
 永遠のわかれのよう手を振りぬ近くに住める病みいる友の
 管のたぐい身につけること望まぬとエンディングノートにはやばやと書き
 自然死を選びし友に頭たれ葬儀の夜の除夜の鐘聞く
 「百歳はゴールではなく関所だよ」日野原先生の色紙の文字に
 やわらかにほほえみ居ます百歳の宴はピンクのスースを召していて
 百四歳までの色紙が飾られて自由な線ののびのびと舞う

近藤栄昭

正月

・信

南天とスプレー菊の白と黄天色の空の似合ふ正月
 いちめんに霜にしづもる原のうへ雪の浅間に煙のうごく
 冬タイヤはかぬ怠惰を笑ふがに一月十日の朝道こぼる
 石垣に石の面みてバスを待つ丸子稻荷社久のにぎはひ
 チンパンジー映れば仕草人に似てテレビ画面に言の葉を欲る
 宗教戦くりかへさるるエルサレム「民族」とふに遠く生きしよ
 アスマルトを雪のはうきが掃いてゆく厳しくならむ午後の歌会は

長雨も日照りも映す不揃ひの林檎の箱に「わけあり」の文字
 「わけあり」の林檎たちもことりことり煮ゆれば淡く紅のさしく
 たつたいま棚のいつものジャムの瓶指先に触れつ記憶はそこまで
 あらうことか台所の床に転がりて何故かガラスの瓶を握りをり
 つのりくる寒さと痛みあるまじきパニックの中に夜を明かしたり
 迂りつきし朝の外来急患と呼ばれストレッチャーに運ばるなり
 艳びやかなるいつもの声を携帯に聴きつつ夕べ病室に安堵す

坂上直美 北方

・天

佐藤道子 たはこと

・甲

天地はあまりに冥し北鮮の凍てつく原に散らばる骸
そのかみの幼な馴染を奪いてし帰還事業の罪を問えかし
北方に樂園などはあらざるに渡りてゆけり見し夢は何
頬を打つ風の冷たさ故郷は遠くにありて思うべきかな
イスラエル沙漠の中に樹てるとう案もありしよ然れど彼の地に
天上に理想の国を見つけしか行きて還らぬ宇宙船あり
神もなく祈りもなく滅びゆく地上に甦れ恐竜たちよ

坂出裕子 春

・洛

友よりの文ある机 寒日のひざしあかるく今朝はさしくる
もうすこしもうひと月で春が来るはげましてをりおのがこころを
のこされた時間わづかと知りながら全力疾走できぬくやしさ
新聞を読めばますます落ち込む日々ひろげ読む鬱のみなもと
人間の善意を読めば思ほえず涙こぼるる老いといふもの
ほんのりと白見えそむる梅が枝に春は来るらしたがふことなく
オリオンをシリウスを見て床につく今日も一日ありがたうとて

佐久間 晟 日乗 (一〇) · 湾

苦しんで悩みつづけるそれだけが人間を向上させるすべてなのかも
純粹な子供はすべてを忘れ去り新しき世界を見つけ出すのに

目的とは航路を定める船のさま頼るは機械 羅針盤のみ

願わくば澄んだ空気のさまにとも生きてゆきたし余生のしばしが
落ち込める友を若しわが明るい月のように照らせれば嬉し

鳥属は何の宴かそれぞれに黒衣をまとい森陰に鳴く

われに残るしばしの時間にひとつ無になる時の欲しきことあり

鈴木結志 平昌五輪

オリンピック二連覇六十六年ぶり羽生結弦のフィギュアスケート
両手上げ孤高のジャンプ重ね技断トツ羽生世界を制す

最速を極むる奈緒の集中力妙なる極み五輪レコード

李相花を奈緒が肩寄せねぎらえる熱き友情涙いざなう

二連続三回転ルツーループ次々と決めてザギトワ頂点に立つ
スピード・スケート科学が生みし研究に日本女子群世界を制す

ライバルの脇くぐりぬけ高木菜那マスタートのゴール黄金

割烹着真白き母は細かりき日向の廊下に仔犬と私
今のことすぐにつれて遠きことふと思ひ出す若かりし父
遠きこと相槌うつ友稀になる私の育ちし昭和のことを
ぼけ防止と言はれて弱しぐれが勧むサプリ一粒口に含みぬ
子の治療私のぼけの防止にと春待つ午後を二胡取り出す
折鶴蘭黒々枯るこの寒さ立春寒波ときれいごと言ふ
姫川石といふを身につけ頼りとす薬より温とく心あるがに

椎名恒治 空

・橋

横にならぶマンションの空に舞ひ来たる鳥の群れて高く飛ぶ
朝は必ず連れありて隣のビルの空巡りて去れり大き鶲
三月一日朝明の雨ひとつにして晴れあがりたり空みづみづし
ドアいく箇所鏡ありて出で入るマンションの六階に一ヶ月経つ
福田龍生を偲ぶ会は昨夜なりき欠席しわかれはこころに忘れず
榮先生の色紙を机に立て掛けて偲びをり「龍生ちゃん」
松の木踏み切り際の「宇田川家」に下宿せし遠き日や

世木田照比古

冬季五輪

・茜

久我田鶴子 にじむ

にじむ

まれに見る異常低温に氷りたる中洲ま白に雪のことかり
ゆるやかに湖満ち来れば前川の氷の面狭まりて行く

異常なる寒さ続けば半世紀前の傷さえ痛みを返す
会心のガッツボーズもメダルには届かず五輪の壁は厚かり

一齊にハイタッチして声挙げぬ羽生のメダルは初の金色
酷寒の五輪会場の争いをTVながらも必死で応援
競技にも囲碁将棋にも十代が大活躍で肩身狭かり

関根榮子 貝母

・埼

「鬼は外」豆を撒きおり昨日降りし薄雪白く残る庭土

北帰行の白鳥の群立つ湖をテレビに見ながらコーヒーを飲む

先生も団子を召すと笑い合う梅ヶ丘に梅見をしたる日を恋う

これくらいは一氣呵成にせしものをこの頃は事を伸ばし伸ばして

早春の日をいち早く受けながらつやつやと群れて芽生えし貝母

一木を削り仏像を彫るを見る指先に集中しゆく入魂は

小惑星の「リュウグウ」を振り「はやぶさ」の地球より一億キロゆく

関根和美 能勢卿子さん

・埼

●「九州の歌人たち」

阿木津英・黒瀬珂潤・五所美子・恒成美代子・馬場昭

徳による企画編集。「現代短歌」一〇一三年九月号より

一〇一五年十一月号まで掲載された「九州の歌人たち」

を初出とし、単行本化するにあたって加筆訂正を加えら

れたもの。

一宮冬鳥・津田治子・浜田到り(十四名の歌人の中に、

桃原邑子も入っており、略年譜と作品のアンソロジー、

その解説を阿木津英が、生涯についてを与那嶺志保が書

いている。

元日の夜の湾岸上空を着陸態勢の灯は連なれる

辛辣が迎合に変はる瞬間をいくたび見しか寄りきれずる

ひとりにより声音かはるを聞かれつて受話器片手に咳きこんでをり

疎開児童青山雅子がうたひだす「海ゆかば」娘に伝へむとして

ベランダの栓に来て無駄のなき動きについばむひよどりの嘴

雲のなかに陽をにじませて雪の降るきさらぎきさらぎこの明るさは

かたはらに「オサビシ村」を引き寄せて抱くやうにする白夜がぬくむ

個 展

稻家 和子

父の望みを継いで

数多なる友を繋ぎし絵手紙の二十年の歴史ここに蘇かえさむ
「多羅葉の大木目当てに会場へおいでください」と案内状書く

書き貯めし五百の絵手紙並べつゝ夢と過ぎたるああ二十年

絵手紙の個展など見にくる人ありや大戸開けば人影並ぶ

車椅子漕ぎて遠くを来し友が「来たよ」と言ひて涙ぐみたり

早朝に京都を出でて今着くと差し出す友の諸手冷えたり

接客の立ち居冷えむと遠来の短歌の友が「ホッカイロ」置く

「いつまでも見て居りたい」とは追従と知れど玄関にその背を送る

高知県の民生委員の視察団序でと寄りて賛辞呉れたり

六日の会期無事に終えぬと扉を鎖して出づれば公孫樹の上に月澄む

多羅葉の葉をもぎてきて誌し置く個展終えたる安堵の一首

風呂に浮かべし柚子の数多に触りつつ終えし個展の反省を積む

個展終え我が金婚の年暮れぬしみじみとして聴く除夜の鐘

私の父は、七十歳になつて短歌を始め、
辭書を引きながら作歌に励み、歌集も出し
ました。その効あってか認知症にもならず、
九十三歳の天寿を全うしました。
その父が生前、私にも、熱心に作歌を勧
めてくれましたが、なかなかその機会がな
く、齡を重ねてしましました。

今思えば口惜しい限りですが、致し方あ
りません。平成二十七年、七十三歳になつ
て、「地中海」に入会させていただき、遅
い出発をしました。

初めの内は、身近な生活から素材を拾つ
て来ましたが、詩情の貧困もあって、次第
にゆき詰まってしまいました。

しかし、ここで挫けてはならず、卒寿を
過ぎてもなお墨縁として指導してくださる
中島義雄先生のもとで、和氣藪々の歌友た
ちの励ましを受けながら、懸命に頑張るよ
り他はありません。

「今月の二人」へ出詠のお知らせをいた
だいたのは、長く趣味として続けてきた絵
手紙の個展を閉じる日のことでした。戸惑
いましたが、「継続は力なり」を信じ、遅
遲とした短歌を続けてゆくことに決めまし
た。どうぞ宜しくお願ひします。

今月の二人

義父との約束

鉄地川原 朱美

ありのままに

二〇一一年三月だった潔く義父が閉業を決断したのは

閉業までレジを使わず売り上げの計算は五玉のそろばんはじき

しもやけになりたるわれにさりげなく馬油差し出すなじみの客は

店先でくしゃみするわれに「お大事に」下校途中の高校生は

夫よりも長い時間を共にした義父とわれとは同志にも似る
目にて言う義父の思いを読むことの早くなりたり介護の日々に

孫守りにしばらく上京してくるから義父よ「死なずに待つてください」

待つという約束守り義父は逝く孫の世話より戻り五日目

義父を送り迎えたる正月を寝込みたり嫁きて四十年初めてのこと

「ゆっくりと寝ていいよ」と言いながら夫は初めて粥作りおり

われのため夫炊きくれし粥に合う乾いた佃煮すっぱい梅干

ます「はい」と言つてしまえばいいのだろう今日は素直に夫に従う

義父の名を大きく記した腕カバー今はわが腕温めている

昭和初期創業の八十年以上続いた昔からの雑貨屋、田舎町に必ず一軒はあった何でも屋。そんな地域の人々にとって、なくてはならない存在であった店に何もわからぬまま嫁いで来ました。東日本大震災の年の三月末で閉業するまで、三十四年間、毎日店に立ち、地域の方々との交流なども含め、病気もせずに元気に続けてこられたことは今にして思えば奇跡のようです。義父母を見送った後、自分の子育てが十分出来なかつたことの埋め合わせに、孫に手をかけることが出来る幸せも噛みしめております。

「地中海」に入会を勧めてくれた藤田美智子さんとは、高校入学から約五十年來の友人です。彼女はいつも忙しそうにせかせかと歩く姿が印象的な女性です。人情味があり、人の話には何でも耳を傾け真剣に聞いてくれます。いつも傍にいてくれる大切な友人です。ゼロから短歌を始めた私の歌はほんやりと間の抜けた作品ばかりです。そんな歌を優しく的確に指導してください。さまざまなことに思いを寄せ、ありのままの自分を詠んでいきたいと思っております。

◆今月の二人・稻家和子作品評
多羅葉の大木目當てに

稻家さんは、岡山県の美咲町在住。昨年、長く続けてこられた絵手紙の個展を開かれたという。

・「多羅葉の大木目當てに会場へおいでください」と案内状書く

個展の案内状に書いた言葉が、そのまま歌になっている。こんな案内状をもらつたら、もらつた人は是非とも行かなくてはと思うにちがいない。

・書き貯めし五百の絵手紙並べつつ夢と過ぎたるああ二十年「五百」の絵手紙、その間の歳月「二十年」。数詞が生きている。実際に並べつつ、その絵手紙の量に歳月を重ね、感慨深いものがあったことだろう。

・車椅子漕ぎで遠くを来し友が「来たよ」と言いて涙ぐみたり

絵手紙によって繋がるたくさんの友。その中には車椅子の友もいて、遠くから来て声をかけてくれた——。嬉しかったことだらう。「遠くを」は、「遠くより」か。あるいは“遠いところをわざわざ”、ということで、「遠きを」か。

・六日の会期無事に終えぬと扉を鎖して出づれば公孫樹の上に月澄む

六日間の会期を終えて、見上げた空の月。情景が目に浮かぶとともに、ホッとした気持ちも伝わってくる。初句は字余り。二句目は「終えたり」として二句切れにする方法もあるか。

・個展終え我が金婚の年暮れぬしみじみとして聴く除夜の鐘

金婚の年でもあったとは！ 良き一年の締めくくり。除夜の鐘の音も格別であったことだろう。

◆今月の二人・鉄地川原朱美作品評
乾いた佃煮すっぱい梅干

評者・久我田鶴子

鉄地川原（てつちかわはら）さんは、福島市在住。雑貨屋に嫁ぎ、二〇一一年の三月まで義父とともに店に立ってきた。

・閉業までレジを使わず売り上げの計算は五玉のそろばんはじ

き
レジを使わず、そろばん（しかも、「五玉の」）というのが、店のあり方を物語る。四句目、大幅な字余り。「計算は」とまでも言わずとも分かるので、「五玉の」を活かして更に工夫を。夫よりも長い時間を共にした義父とわれとは同志にも似る夫は別の仕事をしているのだろう。夫と過ごすよりも義父との時間の方が長く、二人は「同志」みたいだと言う。

・目にて言う義父の思いを読むことの早くなりたり介護の日々に

かつての「同志」の介護の日々。「目にて言う義父の思いを読むこと」が早くなったことを単純に喜ぶことはできない。時間は過酷を強いるものだが、作者はそれは言わない。

・待つという約束守り義父は逝く孫の世話を

約束より戻り五日孫の世話をから帰るのを待っていると約束した義父は、作者が戻った五日後に亡くなつた。「待つ」と言った約束を守つてくれたのだという中には、万感の思いがこもっているようだ。

・われのため夫炊きくれし粥に合う乾いた佃煮すっぱい梅干
寝込んだ「われ」に初めて夫がお粥を炊いてくれた。添えられた「乾いた佃煮すっぱい梅干」。本音を言えば、佃煮は乾いてない方がいいし、梅干しも酸っぱすぎたのかもしれない。

でも、嬉しさは、はるかに上回る。「合つ」と言わせる。